

ジレンマとその先（後編）

挨拶し損なった文花が晴れ晴れと登場。ここからは事務局長が進行役となる。

「では、新年会 兼 鏡開きは十七時より始めたいと思います。その間、桑川さん開発のデータ入力システム『DOPPC』版のデモなどでお楽しみください。あと、掃部センセが余興をご用意くださっているとのことなので、そちらもお楽しみに。会はカンパ式です。アルコール飲まれる方は、最低千円、お願いできれば。えっと、干潟の拾い物で恐縮なんですけど、この発泡スチロール箱の方をお願いしますね。収益が出たら、クリーンアップ基金に回します。」

基金の話は、明らかに思いつきなのだが、冬木から申し出があつた協賛金の口座も設けたところなので、一本化は可能。ツッコミを入れてもよかったのだが、櫻はとりあえず黙っていた。「ここからは文花さんタイムってことで。おとなしくしてよっつ。」とこころが、

「ハイ、櫻さん。集金係、頼みます。」

「つて、勝手に決めちゃっついで。」

「白物、好きでしょ。」

やはりしつかり物申さないといけないようである。

ちなみにこの白物、晩夏の夜に千歳が持って来たシロモノである。これぞリユースの好例(??)。

天気が怪しいこともあり、本日の参加者の何人かは退出。代わりに集金係、いや融資係の女性がやって来た。

「あ、ルフロンさん!」

蒼葉と南実は彼女を同時に呼ぶ。

「へへ、お待たせ。案の定、小雨模様になっちゃった。コメンネ。」

「いいのいいの、乾燥してたから。それにしても、今日はまた程よいウエーブ感だこと。」

「弥生ちゃんにまたボサボサとか云われたくないからさ。」

「ボサボサ、好きだけど。」

「ハクンたらあ。」

元祖ツッコミ担当の弥生嬢は、円卓にてDOPPCのデモ中である。千歳はPC版の係員として着席して操作しているが、傍から見事に突っ込まれている。

「だから、千さん、テンプレートの切替はプルダウン□でって言ったじゃん。」

「だって、新しいのがいろいろ出てくるから間に合わなくて」

「ヤレヤレ。この際まとめて面倒見るか。」

「毎度、スミマキ、でございます（トホホ）」

冬木とその関係者らを含め十人程が囲む中、面目まる潰れの千さんであった。情報誌に掲載される前だったら、面白おかしく書かれてしまうところである。ヤレヤレ。

八広は集計表を見せながら、舞恵とあれこれやっている。女性三人は何となく話を聞いていたが、一人が首を突っ込む。

「それにしてもクリスマスに二人して神戸の海辺とはねえ。須磨だっけ？ どうしてまた。」

「櫻姉ならわかるっしょ？ 何てったって、くりすます、ですから。」

「ハハハ、体感クリーンアップといい、クリ須磨スといい、私が出る幕ないわね。」

蒼葉も南実も目をクリクリさせながら、失笑モード。ルフロンはすまし顔で、

「ワイナリーでこれ買ってきたの。須磨はその帰りに寄っただけ。シャレのためにわざわざ行きませんことよ。オホホ」

「ルフロンて何気にセレブチックねえ」

「悪酔いしなきゃね」

「ハクン、何か言った？」

ボトルで叩かれたら、それこそシャレにならない。

ひととおりの仕度も整ったところで、石島家は三人が揃い、物申すネタを受け付けながらも談笑中。時間前だが、いつ始めてもOK。だが、進行役が固まっただけでは始めようがない。センターの入口にはクーラーボックスが放置してある。持って来た時から置いてあったので、少しは元の姿に戻っているだろうと思っただけ、外の寒気に応じて冷気が保たれていたらしい。

「あちゃー、まだカチンコチンだったわ」

そう、おふみさんへのビックリネタ、急速冷凍したとやらの雑魚の詰め合わせである。

「ま、これなら平気だろ？」

「う……」

図らずも冷凍状態になってしまった文花である。

「て、センセ、もしかしてこれをいただごっつて？」

「自然解凍したら、さっと捌いて素揚げにするよ。あとで調理台、借りるよ。」

「で、その油は？」

「ああ、自家製さ」

「プラスチックを油化？ な訳ないか。」

「ハハ、流域で採った菜の花が原料。菜種油よ。」

「ウチの菜の花でもできますか？」

解凍が進むのに合わせ、文花もほぐれてきた。目に浮かぶは、春の色。油の話で花が咲く。

センターの開館時間は十八時までだが、今日は特別。表向きは繰り上げ閉館ということにしてある。それでも十七時から来館者があつたら、拒むには及ばない。通常通り利用してもらってもよし、新年会に参加してもらってもよし、である。

「皆さんおそろいでしょかね。では乾杯に先だつて、鏡開きと参りましょう。元来、包丁は入れず、割るものなんだそうですが、どなたかやってみたい方・・・」

南実と目が合ったが、まんまと逃げられてしまった。男性諸氏も腰が引けている。と、再び名乗り出るは弥生のお嬢さんである。

「え？ 大丈夫？」

「行きますよ。ハッ！」

さすがはベース弾き。腕っ節は強かった。一番下の大きい円盤餅を難なく真つ二つに割ると、「お粗末様でした」。今日は何かと喝采を浴びる弥生。その脇ではすっかり恐れをなしている女性が佇む。

「この娘を敵に回すと怖いことになりそう・・・でも、負けないワ。」

雑魚は解けた。文花はその逆。いい意味で硬直している。

会議スペースの長机を並べ直して、中央にカセットコンロを設置。窓を開けたら、いざ点火。大鍋には、調合済みの冬野菜汁。そこに割って切った餅が入る。グツグツやっている横で事務局長によるご発声がかかる。

「挨拶は又キ。とりあえず乾杯！」

文花を除く nigat a の面々は、神戸のワインで盛り上がる。下戸の南実も一口二口なら大丈夫そうだ。だが、すでに頬が赤い。千歳はふとサルビアの紅を思い出し、紅潮する。

二人はやはり似ている、ということか。

さて、ついさっきまでゴミ見本の品定め（ネタ集め？）なんかを黙々とやっていたおば様だが、ここからは喧々と仕切り役に就く。

「はいはい、緑色関係は任せて頂戴。カモンさん、魚と一緒に入ってたヤツ持ってらっしゃいよ。」

「さすがは緑さんだあな。あいよ。」

「ナスナ、ハハコグサ、ハコベかあ。そうそう、おふみさん、ダイコンの葉っぱは？」

「洗い場にあります」

「じゃ、スズシロはOKね。ま、あとはこのヨモギで代用すれば、五草。」

七草粥に非ず、五草雑煮が振る舞われることになる。

「これからはお奉行様と呼んで進ぜよう。シシ」

「結構よ。でも掃部かみの守にお仕えするつもりはございませんから。」

「ま、確かに流浪の作家さんにお仕えはムリだわな」

「ハ、似たり寄ったりでしょが」

雑煮奉行様の手は止まったまま。これじゃ煮沸してしまう。文花は気が気でない。

「ああ、おば様」

「あら、おたまは？」

「そりゃ、アンタのことだろ？」

「たく口が減らないんだから。いいから、その箸貸して。」

掃部守は、菜箸のような不思議な一膳を手にしていた。それなりに使い込んでいる。つまりマイ箸。そんなマイ箸持参者はいにく少数だが、文花が気を利かせて多めに塗り箸を持って来ていたので事なきを得た。器やグラスはセンターの常備品で間に合う。飲料はビンが中心。ケータリングのピザが玉に瑕きずといったところ。

「この箱が一方通行なのよねえ。引き取りに来るとなると、コストがかっちゃうから、仕方ないけど。」

「水溶性にする訳にもいかないし。ある程度キレイにして古紙回収に出すのがベターですかね？」

美味しそうに頬張っている文花と櫻だが、話題はこの通り、協議の続きのようになってい

る。
「ま、そういう話もいいけど、淑女淑女はやっぱり美の追求じゃございませんこと？ 文花さんも姉さんもお口の周り……」

すかさずルフロンが大鏡を開く。これも鏡開きの一種である。

「まあ、これじゃ看板娘の名が泣くワ」

「は？ 娘？ ああハコ入りでしたっけね。あ、そうそうハ」と言えば。集まりましたよ。ハイ！」

お互い顔を見合わせながら、大笑い。笑う門にはカンパ来る、ということのようだ。

歓談続く折だが、余興の頃合いとなった。センチによる魚調理の始まり始まり。

「こいつはさすがに換気扇のあるところじゃねえとな。ま、狭いけど、見学歓迎。荒川の恵みも堪能あれ、ってな。」

主にボラとスズキ。小さい部類なので、捌きにくいところだが、実に手際がいい。あつさり下ると、油にジャー。

「いけね、おたまさんにとられちゃったんだ」

「あ、取ってきまーす」

文花が箸を取りに行っている間、石島母子はじめ、見学者一同は揚がる様子を眺めていたが、南美だけは俎の上をジロジロ。

「ねえ、先生。この内臓にプラスチック粒とかって・・・」

「さあな、解剖してみねえことには」

「どっしょっかな」

この日、研究員はすっかりジッパー袋を持って来ていた。予防に向けた研究を進めるにしろ、まだまだ現象面も押さえていたいと思う。臓物の運命、推して知る可し、である。

雑煮も素揚げも大皿料理も好評裡に片付き始めていた。帰る客もチラホラと出てくる。十八時を過ぎた頃には、石島家の人々も帰途に。今残っているのは、プチ理事会に出る面々といざ@メンバー。乾杯の時の半分程の人数になっている。

幾分閑散となった会場を見ながら、櫻は久々に憂い顔を見せる。それはちょっとした寂しさを感じてのこと。

「なんか、千歳さんが真面目にやると、その分、私との時間とかって減っちゃうのかなあ・・・ジレンマだ」

かねがね櫻を慕っていた弥生は、そんな憂いに反応したようで、また違うジレンマ話をし出す。

「ディスプレインして思ったんですけど、ゴミが減ると、クリーンアップする回数も減ることですよ。これは本来望ましいことなんですよけど、つまりその、皆さんと顔を合わせる機会も減っちゃう、ってことになりませんか？ ねえ、櫻さん。」

「そ、そうかも知れないけど・・・」
雑談の一環ではあるが、哀愁が色濃くなってくる。それでも櫻は気を取り直し、

「ホラ、下流側にプチ干潟があるじゃない。いつものところが目処立ったら、今度はそっちを。」

すると、冬木が申し訳なさそうに白状する。

「実は隔月で、あそこのクリーンアップ始めてまして。先月も学生連中なんかと一緒に。十月の取り組みがすっかり継承されていることがわかり、本来なら大いに結構なお話なのですが、どうもそうならないところが、曲者ゆえの悲哀だろうか。否、それだけジレンマの度が大きい、ということなのである。

「余計なことを、って言っちゃいけないわね」 文花も憂いを込めてポツリ。

「ゴミを減らしつつも、クリーンアップの場は維持する、って、矛盾スねえ」 八広もお手上げの弁。

「顔を合わせるって以上に、拾って調べて、があるから、かぁ・・・」 蒼葉は的確な寸評を挟む。南実は黙して語らず、である。

だが、この女性は違った。協議の場になかったせいもあるだろう。舞恵は極めて楽観的。

「だったら別にゴミ減らさなくても・・・ 何てね。ま、ただ集まるだけじゃ物足りないってんなら、クリーンアップ以外の共同作業を始めればいいんよ。やっぱバンドでしょ。」

「でも、それはおまけみたいなものだった訳で・・・」 櫻は少々懐疑的だが、

「いや、メッセージングとかご当地ソングとか、それで予防につながるなら」 千歳は前向きに応じる。

「そうそう、そんないきなり漂着ゼロにもならないだろうから、バンド活動とクリーンアップを交互にやってみるとか。センターとしても応援しますわよ。」 文花はお気楽なことをのたまう。担当楽器があれば、そうも言ってもらえないと思うが。

「となると、益々田さんに頑張ってもらわないと」「言いだしっぺの弥生がすっかり晴れとなったので、この話はここまで、と相成った。

プ子理事会と称するのは憚られるが、アルコールが入った状態での議事というのは頼りないもの。正規扱いしないとすれば、こつ呼ぶしかあるまい。開始は一応、十八時半から。まだ多少の時間がある。

「おふみさん、そついやアルコールって口にされてないような」

「今日はクルマだから呑めないんだワ。ま、私、お酒入ると大変になっちゃうみたいだから。イブの時も・・・ あ、八八八、これから議事もありますし、ネ。」

クルマというのを聞き付けて、同乗希望者が現われる。

「ま、下流方向の方々はお送りします。奥宮、宝木、小松の各氏でいいかしら？ 待たせちゃうけど、その間、カレンダーとか手帳とか、よければ選んでて。」

文花の気の利き様はこれにとどまらない。

「そうそう、おすみさん。今日の分、謝金をお出ししないとね。」

「いえいえ、出勤日ですから」

「だって、あの資料、櫻さんのこと放っぱらかして作ってたんでしょ？ 埋め合わせしなきゃ。ねえ？」

櫻は返す言葉がなかった。「嬉しいけど、埋め合わせで済まされるのも何だなあ・・・」

またしても心境の整理が必要になってくる。と、ここで南実がようやく千歳をつかまえると、

「フローチャートのデータ、ください！」 いつもの直球でスバツ。

「USBメモリとか持ってます？」

「じゃ、これに」

「へ？ それって、ケータイストラップじゃ？」

「丈夫なんですよ。しかも防水。」

櫻は居ても立ってもいられない。「私との恋愛プロセスよりもそっち優先？ もっつ！」

何に妬いてるのがすっかりわからなくなっている。南実に対してでないことは確かなのだが・・・

すでに定刻を過ぎているのだが、この二人が揃わないことには始まらない。

「て、千歳さん、自分のプロセスで先に進んでっちゃう感じ。少しは相方と相談してほしいな。」

「それって、今日の話？」

「もあるけど、そのあ・・・」

「だよな。サプライズは程々につて？」

千歳はちゃんとわかっている。サプライズネタを忍ばせながらも、原則手堅く進めようとする余り、彼女のもどかしさを招いてしまっているだけなのである。だが、弥生と違って、櫻はピリピと来る。

「そっか、ゆっくり見せかけといて実は、ってこと？ それともただのトリック？」

ヤキモキもプロセスのうちと考えればこそ。櫻なりにステディ感を楽しんでいるようである。

後片付けを手伝っていた弥生と冬木だったが、程なく退出した。蒼葉、舞恵、南実は飲料を空けながらよもやま話。

「蒼葉嬢はA。こまつつぁんはMなんだからM。舞恵もMだけど・・・」

「それ、何の話？」 前出のMさんが聞く。

「バンドやるんだったら、名前付けなきゃって思ってた。で、皆のイニシャルくつつける

と何か単語になるんじゃないかと。」

Aさんは一人「姉さんはS、千兄さんもS？ じゃないや、C？ いや隅田だから・・・」
CとSで悩んでいる。（企業の社会的某ではない。念のため。）

会議スペースではやっとこさ、理事会が始まる。といっても、運営委員も交えてなので意見交換会といったところか。新理事・新運営委員数名に、清、緑、千歳、櫻、八広、そして議長の文花がテーブルに着く。議題は二つ。ホワイトボードを持ち出すまでもないようだ。

「おかげ様で、環境情報サイトはぶざまですっかり定着。協賛金ベースでめでたく運用が始まった例のデータ入力システムはROOに決まりました。ネーミングがまだだったのは当法人の名称だった訳ですが・・・」

こっちでも名前の議論になっている。このNPO法人何々の件は、新年会でも話題になり、何となく同意もとれていたのだが、書いてみないことには実感が沸かない。文花は意識的に丸文字調で裏紙にしたためてみる。

「で、こうなります。『いきいき環境計画』！」

「ほお、カタカナじゃなかったか。ま、イケイケと間違われないようにするには、その方がいいか。」

清はどことなく自重気味にコメントすると、イケイケ批評家の八広氏がその心を説明する。

「生き生き、がお題目ですが、『いき』にはまず地域の域、そして心意気の意気、粋だねえの粋なんかが込められると思います。あと、息づく、もスね。」

さすが、コピーライティングのセンスが活きている。横文字を避けたのは略称を考慮していること。してその略称とは？

「いいカンケイ、ってことになりますかね」

ここは櫻のひと声で即決。キャッチフレーズもすんなり行きそうである。

次の議題は、部会と講座。二月についてはクリーンアップ講座で行くとしても、さて三月は？

「今日の話で思ったんだけど、クリーンアップを仮に『現場部会』の一環にすると、櫻さんのやりたかったことの部会行事って別にできるかな、って。」

「もしかして探訪、のことですか？」

「そつそつ、今日だつていいこと言ってたじゃない。ねえ、皆さん？」

かくして、マップづくり教室をやってみてはどうか、という方向で一致する。継続的に取り組めそうならそのまま部会化。何色のマップができるかは、当日のお楽しみ、となる。

「探訪ってことなら、探偵さんにも出てもらわねえとな」

「ホホ、虫眼鏡だって双眼鏡だって、よりどりみどりさんよ」

「おは様と一緒になら、やっぱりグリーンマップでしょうね」

とまあ、終始和やかな感じで議事の方も開きとなる。だが、櫻の議事は終わらない。

「現状を伝えるためのA・I・Sマップ。こつしたいっていつモデルを描くT・B・Bマップ。その二本立てで地域再発見！なんていいかも。フフ」

それはそれで結構な企画なのだが、皆が気になるのはCさんとSさんのT・B・Bの方？かも知らない。

© ronald ogger